

数理科学特論C
楕円型・放物型偏微分方程式の最大値原理

松澤 寛

0 Notations

- ここ節ではいくつかの記号を準備する.
- N 次元 Euclid 空間 \mathbb{R}^N は

$$\mathbb{R}^N := \{x = {}^t(x_1, \dots, x_N) : x_i \in \mathbb{R}\}$$

で定義され, $x = {}^t(x_1, \dots, x_N) \in \mathbb{R}^N$ のノルム $|x|$ は

$$|x| = \sqrt{\sum_{i=1}^N |x_i|^2}$$

で定義される.

- $U \subset \mathbb{R}^N$ を開集合, $u : U \rightarrow \mathbb{R}$, $x \in U$ とする. u の x において x_j について**偏微分可能**であるとは

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{u(x + h\vec{e}_i) - u(x)}{h}$$

が存在することであり, このとき上の極限を

$$\frac{\partial u}{\partial x_j}(x)$$

で表し, u の x における x_j に関する偏微分係数という. ここで \vec{e}_i は x_i 方向の基本ベクトルである.

- u が各 $x \in U$ において x_j について偏微分可能であるとき

$$x \mapsto \frac{\partial u}{\partial x_j}(x)$$

を u の x_j に関する偏導関数といい $\frac{\partial u}{\partial x_j}$ とも表す. また $\frac{\partial u}{\partial x_j}$ の代わりに u_{x_j} と表すこともある. 同様に $\frac{\partial^2 u}{\partial x_i \partial x_j} = u_{x_j x_i}$, $\frac{\partial^3 u}{\partial x_i \partial x_j \partial x_k} = u_{x_k x_j x_i} \dots$ なども定義される.

- 非負整数を成分にもつベクトル $\alpha = (\alpha_1, \dots, \alpha_N)$ を**多重指数**という. 多重指数 $\alpha = (\alpha_1, \dots, \alpha_N)$ に対しては $|\alpha| = \alpha_1 + \dots + \alpha_N$ で定義し, $|\alpha|$ をその多重指数の**次数**という.
- 多重指数 $\alpha = (\alpha_1, \dots, \alpha_N)$ に対して微分作用素 D^α を次で定義する:

$$D^\alpha u(x) := \frac{\partial^{|\alpha|} u}{\partial x_1^{\alpha_1} \dots \partial x_n^{\alpha_n}}(x) = \partial_{x_1}^{\alpha_1} \dots \partial_{x_n}^{\alpha_n} u$$

- 非負整数 k に対して $D^k u(x) = \{D^\alpha u(x) : |\alpha| = k\}$

$$|D^k u| = \left(\sum_{|\alpha|=k} |D^\alpha u|^2 \right)^{1/2}$$

と定義する.

- 特別な場合として $k = 1$ のときは $Du(x)$ はベクトル

$$Du(x) = (u_{x_1}(x), \dots, u_{x_N}(x))$$

とし, $k = 2$ のときは $D^2 u(x)$ は行列

$$D^2 u(x) = \begin{pmatrix} u_{x_1 x_1}(x) & \cdots & u_{x_1 x_N}(x) \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ u_{x_N x_1}(x) & \cdots & u_{x_N x_N}(x) \end{pmatrix}.$$

として定義する.

- $\Delta u = \sum_{k=1}^N \frac{\partial^2 u}{\partial x_k^2}$ で定義し Δ を**ラプラシアン**という.
- いくつかの関数空間を定義する: $C(U), C^k(U)$ を

$$\begin{aligned} C(U) &= \{u : U \rightarrow \mathbb{R} : u \text{ is continuous}\}, \\ C^k(U) &= \{u : U \rightarrow \mathbb{R} : D^\alpha u \in C(U) \text{ for } |\alpha| \leq k\}. \end{aligned}$$

で定義する. また U が有界のとき

$$\begin{aligned} C(\bar{U}) &:= \{u : \bar{U} \rightarrow \mathbb{R} \mid u \text{ は連続}\}, \\ C^k(\bar{U}) &:= \{u \in C^k(U) : |\alpha| \leq k \text{ なる各 } \alpha \text{ に対し } D^\alpha u \text{ は } \bar{U} \text{ に連続に拡張できる}\} \end{aligned}$$

と定義する.

本講義における参考文献は以下のとおりである.

参考文献

[Evans] L. C. Evans, Partial Differential Equations, second edition, volume 19 of Graduate Studies in Mathematics. American Math. Society, Providence, 2010.

[Friedman] A. Friedman, Partial Differential Equations of Parabolic Type, Dover, 2008(R. E. Krieger Publishing Company, 1983)

- [**Gilberg-Trudinger**] D. Gilbarg and N.S. Trudinger, Elliptic Partial Differential Equations of Second Order. Springer Verlag, 1983.
- [**Han-Lin**] Q. Han and F. Lin, Elliptic Partial Differential Equations, second edition, Courant Lecture Notes 1, American Math. Society, 2011.
- [**Lam-Lou**] K-Y Lam and Yuan Lou, Introduction to Reaction-Diffusion Equations: Theory and Applications to Spatial Ecology and Evolutionary Biology, Springer, 2022.
- [**Lieberman**] G. M. Lieberman, Second Order Parabolic Differential Equations, World Scientific, 1996.
- [**Protter-Weinberger**] M.H. Protter and H.F. Weinberger, Maximum Principles in Differential Equations, Springer, 1984(Prentice-Hall, 1967)
- [**Smoller**] J. Smoller, Shock waves and reaction-diffusion equations, second edition, Springer, 1994.
- [**二宮**] 二宮広和, 侵入・伝播と拡散方程式, 共立出版, 2014

1 調和関数

1.1 定義と平均値の性質

- 調和関数の定義がらはじめよう.

定義

$U \subset \mathbb{R}^N$ を領域とする. 関数 $u \in C^2(U)$ は

$$\Delta u = 0$$

を満たすとき**調和関数**といわれる.

- 調和関数の特徴づけについて述べよう.

定義

$U \subset \mathbb{R}^N$ を領域とし $u \in C(U)$ とする.

- (1) u が **第2平均値の性質** を満たすとは $\overline{B_r(x)} \subset U$ なる任意の $B_r(x) = \{x \in \mathbb{R}^N : |x - y| < r\}$ に対して

$$u(x) = \frac{1}{\omega_N r^{N-1}} \int_{\partial B_r(x)} u(y) dS_y \quad (1.1)$$

を満たすことである. ここで ω_N は \mathbb{R}^N の単位球面積を表す.

- (2) u が **第1平均値の性質** を満たすとは $\overline{B_r(x)} \subset U$ なる任意の $B_r(x)$ に対して

$$u(x) = \frac{N}{\omega_N r^N} \int_{B_r(x)} u(y) dy \quad (1.2)$$

が成り立つことである.

注意:

- (1) 実は上の2つの性質は同値である. 実際, $u \in C(U)$ が第2平均値の性質を満たすとすると, $\overline{B_r(x)} \subset U$ なる $B_r(x)$ と任意の $\rho \in [0, r]$ に対して

$$u(x) \rho^{N-1} = \frac{1}{\omega_N} \int_{\partial B_\rho(x)} u(y) dS_y.$$

が成り立つ. 両辺を $\rho = 0$ to $\rho = r$ まで積分すると

$$u(x) \frac{r^N}{N} = \frac{1}{\omega_N} \int_{B_r(x)} u(y) dy.$$

となる. $B_r(x) \subset U$ は任意だから u は第1平均値の性質を満たす.

逆に $u \in C(U)$ が第1平均値の性質を満たすとすると $\overline{B_r(x)} \subset U$ なる任意の $B_r(x)$ と任意の $\rho \in (0, r)$ に対し

$$u(x)\rho^N = \frac{N}{\omega_N} \int_{B_\rho(x)} u(y) dy = \frac{N}{\omega_N} \int_0^\rho \int_{\partial B_s(x)} u(y) dS_y ds.$$

が成り立つ. 両辺を微分すると

$$Nu(x)\rho^{N-1} = \frac{N}{\omega_N} \int_{\partial B_\rho(x)} u(y) d\sigma_y.$$

を得る. $\rho \rightarrow r - 0$ として

$$Nu(x)r^{N-1} = \frac{N}{\omega_N} \int_{\partial B_r(x)} u(y) dS_y.$$

を満たす. $B_r(x)$ は任意なので u は第2平均値の性質を満たす.

(2) 極座標変換 $y = x + rw$ ($w \in \partial B_1(0)$) によって (1.1) の等式は

$$u(x) = \frac{1}{\omega_N} \int_{\partial B_1(0)} u(x + rw) dS_w$$

となる. 極座標変換 $y = x + rz$ ($z \in B_1(0)$) によって等式 (1.2) は

$$u(x) = \frac{N}{\omega_N} \int_{B_1(0)} u(x + rz) dz.$$

と表される

定理 1.1

$u \in C^2(U)$ が調和関数であれば, 第1及び第2平均値の性質を満たす.

証明:

- u が第1平均値の性質を満たすことを示せばよい.
- $x \in U$ と $r > 0$ を $\overline{B_r(x)} \subset U$ なるように任意に選ぶ. $\rho \in (0, r)$ に対して $\phi(\rho)$ を

$$\phi(\rho) := \frac{1}{\omega_N} \int_{\partial B_1(0)} u(x + \rho w) dS_w.$$

で定義する.

- $u \in C^2(U)$ より $|Du|$ は $\partial B_\rho(x)$ で有界であることに注意すると微分と積分の交換ができて

$$\begin{aligned}\phi'(\rho) &= \frac{1}{\omega_N} \int_{\partial B_1(0)} \frac{d}{d\rho} u(x + \rho w) dS_w \\ &= \frac{1}{\omega_N} \int_{\partial B_1(0)} Du(x + \rho w) \cdot w dS_w \\ &= \frac{1}{\omega_N \rho^{N-1}} \int_{\partial B_\rho(x)} Du(y) \cdot \frac{y-x}{\rho} dS_y \\ &= \frac{1}{\omega_N \rho^{N-1}} \int_{\partial B_\rho(x)} \frac{\partial u}{\partial \nu} dS_y\end{aligned}$$

を得る. Gauss-Green の公式 (後述) より

$$\frac{1}{\omega_N \rho^{N-1}} \int_{\partial B_\rho(x)} \frac{\partial u}{\partial \nu} dS_y = \frac{1}{\omega_N \rho^{N-1}} \int_{B_\rho(x)} \Delta u(y) dy = 0.$$

となる.

- したがって $\phi(\rho)$ は $(0, r)$ 上で定数関数であるから

$$u(x) = \lim_{\rho \downarrow 0} \phi(\rho) = \lim_{\rho \uparrow r} \phi(\rho) = \frac{1}{\omega_N r^{N-1}} \int_{\partial B_r(x)} u(y) dS_y.$$

を得る. したがって u は第 1 平均値の性質を満たす. \square

注意: Gauss-Green の公式について述べる: $\Omega \subset \mathbb{R}^N$ は滑らかな境界 $\partial\Omega$ をもつ有界領域とする. このとき, $u \in C^1(\bar{\Omega})$ に対し

$$\int_{\Omega} u_{x_i} dx = \int_{\partial\Omega} u \nu_i dS_x,$$

が成り立つ. ここで $\nu (= \nu(x)) = (\nu_1, \dots, \nu_N)$ は $\partial\Omega$ の (点 $x \in \partial\Omega$ における) 外向き法線ベクトルである. さらに $u \in C^2(\bar{\Omega})$ ならば u を u_{x_i} に置き換えることにより

$$\int_{\Omega} u_{x_i x_i} dx = \int_{\partial\Omega} u_{x_i} \nu_i dS_x$$

したがって

$$\int_{\Omega} \Delta u dx = \int_{\partial\Omega} Du \cdot \nu dS_x = \int_{\partial\Omega} \frac{\partial u}{\partial \nu} dS_x.$$

を得る.

定理 1.2

$u \in C^2(U)$ が第 1 あるいは第 2 (したがって両方の) 平均値の性質を満たすならば u は調和関数である.

証明:

- $\Delta u \neq 0$ とする. このとき $\Delta u(x) > 0$ or $\Delta u(x) < 0$ となる $x \in U$ が存在する. 前者を仮定してよい. 後者であれば $-u$ を考えればよい.
- $u \in C^2(U)$ より $\overline{B_r(x)} \subset U$ かつ $\Delta u > 0$ が $B_r(x)$ で成り立つような $r > 0$ が存在する.
- u は平均値の性質を満たすので, 定理 1.1 の証明で用いた $\phi(\rho)$ は $\phi(\rho) = u(x)$ つまり $\phi'(\rho) = 0$ $\rho \in (0, r)$ を満たす.
- しかし, 定理 1.1 の証明と同様にして

$$\phi'(\rho) = \frac{1}{\omega_N \rho^{N-1}} \int_{B_\rho(x)} \Delta u(y) dy > 0,$$

を得るのでこれは矛盾である. したがって u は調和関数である. \square

注意: 実は $u \in C(U)$ が平均値の性質を満たすならば $u \in C^2(U)$ であり u は調和関数であることが示される (see [Evans], [Han-Lin]).

1.2 最大値原理

定理 1.3 (強最大値原理)

$U \subset \mathbb{R}^N$ を領域とし $u \in C(U)$ は平均値の性質を満たすとする. もし $u(x_0) = \max_{x \in U} u(x) (=: M)$ を満たすような点 $x_0 \in U$, つまり, $u(x) \leq u(x_0)$ ($x \in U$) を満たすような点 $x_0 \in U$ が存在するならば u は U 上の定数関数である.

証明:

- $u(x_0) = \max_{x \in U} u(x) (=: M)$ つまり $u(x) \leq u(x_0)$ ($x \in U$) なる $x_0 \in U$ が存在すると仮定する.
- V を

$$V := \{x \in U \mid u(x) = M\}.$$

と定義する. このとき V は U の相対閉集合である.

- V は U の相対開集合であることを示そう. 平均値の性質から

$$M = u(x_0) = \frac{N}{\omega_N r^N} \int_{B_r(x_0)} u(x) dx \leq M$$

が任意の $r \in (0, \text{dist}(x_0, \partial U))$ に対して成り立つ. したがって $u(x) \equiv M$ が $B_r(x_0)$ 上で成り立つ, つまり $B_r(x_0) \subset V$ が成り立つ. つまり V は相対開集合である.

- U は連結であるから $V = U$ が成り立つ. \square

注意：

- (1) $V \subset U$ が U の相対開集合であるとは任意の $x_0 \in V$ に対して $U_r(x_0) \cap U \subset V$ を満たす $r > 0$ が存在することである. 次に $F \subset U$ が U の相対閉集合であるとは $U \setminus F$ が U の相対開集合であることである.
- (2) 同様にして $u(x_0) = \min_{x \in U} u(x) (=: m)$ となる $x_0 \in U$, つまり $u(x) \geq u(x_0)$ ($x \in U$) となる $x_0 \in U$ が存在するならば $u \equiv m$ が成り立つことを証明できる.

系 1.4 (弱最大値原理)

$U \subset \mathbb{R}^N$ を有界領域とする. $u \in C(\bar{U}) \cap C^2(U)$ が調和関数であるならば

$$\max_{x \in \bar{U}} u(x) = \max_{x \in \partial U} u(x)$$

および

$$\min_{x \in \bar{U}} u(x) = \min_{x \in \partial U} u(x).$$

が成り立つ.

証明： 最大値に関する主張のみ証明する.

- $\bar{U} \supset \partial U$ であるから $\max_{x \in \bar{U}} u(x) \geq \max_{x \in \partial U} u(x)$ は明らかである.
- 次に $\max_{x \in \bar{U}} u(x) > \max_{x \in \partial U} u(x)$ とする. このとき $u(x_0) = \max_{x \in U} u(x)$ となる $x_0 \in U$ が存在する. しかし定理 1.3 より u は定数となり矛盾である. \square

定義

$U \subset \mathbb{R}^N$ を領域とし $u \in C^2(U)$ とする.

- (1) U 上 $-\Delta u \geq 0$ が成り立つとき u は U 上 **優調和関数** であるという.
- (2) U 上 $-\Delta u \leq 0$ が成り立つとき u は U 上 **劣調和関数** であるという.

- 定理 1.1, 定理 1.3 及び系 1.4 の証明から次のことがわかる.

命題 1.5

$U \subset \mathbb{R}^N$ を領域とし $u \in C^2(U)$ とする.

(1) u が優調和関数ならば $\overline{B_r(x)} \subset U$ なる任意の $B_r(x)$ に対し

$$u(x) \geq \frac{1}{\omega_N r^{N-1}} \int_{\partial B_r(x)} u(y) dS_y, \quad u(x) \geq \frac{N}{\omega_N r^N} \int_{B_r(x)} u(y) dy.$$

が成り立つ.

(2) u が劣調和関数ならば, $\overline{B_r(x)} \subset U$ なる任意の $B_r(x)$ に対し

$$u(x) \leq \frac{1}{\omega_N r^{N-1}} \int_{\partial B_r(x)} u(y) dS_y, \quad u(x) \leq \frac{N}{\omega_N r^N} \int_{B_r(x)} u(y) dy.$$

が成り立つ.

命題 1.6 (強最大値原理)

$U \subset \mathbb{R}^N$ を領域とし $u \in C^2(U)$ とする.

(1) u を優調和関数とする. もし $u(x_0) = \min_{x \in U} u(x) (=: m)$ を満たす $x_0 \in U$ が存在するならば U 上 $u \equiv m$ が成り立つ.

(2) u を劣調和関数とする. もし $u(x_0) = \max_{x \in U} u(x) (=: M)$ を満たす $x_0 \in U$ が存在するならば U 上 $u \equiv M$ が成り立つ.

系 1.7 (弱最大値原理)

$U \subset \mathbb{R}^N$ を有界領域とし $u \in C(\overline{U}) \cap C^2(U)$ とする.

(1) u が優調和関数ならば

$$\min_{x \in \overline{U}} u(x) = \min_{x \in \partial U} u(x)$$

が成り立つ.

(2) u が劣調和関数ならば

$$\max_{x \in \overline{U}} u(x) = \max_{x \in \partial U} u(x)$$

が成り立つ.

境界値問題への応用

- ポアソン方程式の境界値問題を考える：

$$\begin{cases} -\Delta u = f & \text{in } U, \\ u = g & \text{on } \partial U, \end{cases} \quad (1.3)$$

ここで $U \subset \mathbb{R}^N$ は有界領域, $f \in C(U)$, $g \in C(\partial U)$ は与えられた関数である.

命題 1.8 (一意性)

$u, v \in C(\bar{U}) \cap C^2(U)$ はともに (1.3) の解とする. このとき U 上 $u = v$ が成り立つ.

証明: $w = u - v$ とおく. このとき w は U 上で調和関数であり ∂U 上で $w = 0$ が成り立つ. よって系 1.4 より任意の $y \in U$ に対して

$$0 = \min_{x \in \partial U} w(x) = \min_{x \in \bar{U}} w(x) \leq w(y) \leq \max_{x \in \bar{U}} w(x) = \max_{x \in \partial U} w(x) = 0.$$

したがって U で $u \equiv v$ が成り立つ. \square

命題 1.9 (比較原理)

$u_1, u_2 \in C(\bar{U}) \cap C^2(U)$ をそれぞれ (1.3) において $f = f_i, g = g_i$ ($i = 1, 2$) とした解とする. もし U 上 $f_1 \geq f_2, \partial U$ 上 $g_1 \geq g_2$ を満たすならば $u_1 \geq u_2$ in U .

命題 1.10 (強比較原理)

$u_1, u_2 \in C(\bar{U}) \cap C^2(U)$ は命題 1.9 の仮定を満たすとする. このとき U 上で $u_1 \equiv u_2$ あるいは $u_1 > u_2$ のいずれかが成り立つ.

注意:

- U が有界でない場合, 命題 1.8, 1.9, 1.10 は一般には成り立たない. 例えば $U = \{x \in \mathbb{R}^N : |x| > 1\}$ とし $N = 2$ のとき $u(x) = \log|x|$, $N = 3$ のとき $u(x) = |x|^{2-N} - 1$ とすると u は $f = 0, g = 0$ とした (1.3) の解である. しかし $v(x) \equiv 0$ も解である.